

平成 21 年度

広島経済大学卒業論文

広島経済大学改革論 ～大学全入時代への挑戦～

広島経済大学経済学部ビジネス情報学科

1814088

中口 雄志郎

目次

1. はじめに	1
2. 私立大学の現状	2
2. 1 大学の増加と学生の減少	2
2. 2 私立大学の様々な取り組み	6
2. 2. 1 ユニークな学部・学科を持つ大学	6
2. 2. 2 特徴的な教育を実施する大学	8
3. 広島経済大学を考察する	12
3. 1 経済学部という単一の学部	12
3. 1. 1 単一学部のデメリット	12
3. 1. 2 経済学部という単一学部であることのメリット	12
3. 1. 3 新たな学部・学科を新設するという考え	13
3. 2 興動館教育プログラム	14
3. 2. 1 興動館プロジェクト	14
3. 2. 2 興動館科目	15
3. 3 大学と教員の教育に対する熱意	19
3. 4 学生の勉学に対する姿勢	20
4. 広島経済大学改革のために	21
4. 1 広島経済大学が目指すもの	21
4. 2 実質的な就職力の向上	22
4. 2. 1 必修制度の拡充	22
4. 2. 2 就職活動支援科目	24
4. 2. 3 大学側の「教育」に対する意識改革	26
4. 4 学生の改善	28
5. おわりに	31
参考文献	31

1. はじめに

数年前までは「大学卒」というブランドはとても大きなものだっただろう。しかし今や大学を卒業しているということに、必ずしも大きな付加価値が与えられる訳ではない。それは、大学の敷居が著しく低いものとなったからだ。大学設置基準の緩和により年々大学の数が増加した結果、大学間での競争が激化した。さらには少子化も追い討ちをかけ、大学経営はより一層厳しいものへと移行した。大学も生き残るためには、学生を確保する必要がある。そのため、敷居を下げてでも、入学者を集めなければならなかった。その結果、現在のような「大学卒」が当たり前の時代になってしまったのである。

しかし、このような時代でも、国立大学や有名私立大学など、実績・知名度共に認められた大学は、今現在もそのブランドを強固なものとして確立している。つまり、同じ「大学卒」という肩書にも大きな格差が生じてきていると言える。今までは、それでも良かったのかもしれない。しかし、年々深刻化する少子化に伴い、大学が淘汰される時代に突入してきているのだ。私はこれが大きな問題だと考える。つまり、格差で負けた大学が崩壊するような時代に突入してきているのである。

そして、これは私の在籍している広島経済大学においても他人事では済まされない状況下にあることは間違いない。私はこのまま大学が今まで通りに運営されては、いずれ崩壊してしまうのではないかと危惧しており、今までとは違った形で大学を改革していく必要があると考える。そこで、本論文では広島経済大学をより良い大学とするための大学改革案を提案する。広島経済大学を中心に本論文を進めていく理由としては、私自身が今現在広島経済大学に在籍していることもあり応援したい、力になりたいという思いが強いことが第一に挙げられる。さらに、国立大学¹よりも私立大学の方が当然淘汰される危険性が高いため、私立大学である広島経済大学を取り上げることとする。そして、本論文が他の私立大学向上にも繋がれば、各私立大学間が切磋琢磨しあい、より良い大学教育が可能になると考えている。私が考える大学改革案として、大学側と学生側、両方の改革が必要だと考え、双方の立場にたった解決策を提案する。具体案として、大学では魅力ある教育を推進し、就職率などの実績を残すことで・・・(後で作成します)

本論文では、まず第 2 章で私立大学の現状を考察する。今現在の様々な私立大学の現状を知ること、大学が淘汰される時代に突入した背景、その危険性について明確にする。さらに、実際に廃校となった大学や学部、学科を知ること、問題点を考察し、それらに対して既存の様々な私立大学ではどのような取り組みがなされているのかを知る。そして、第 3 章では実際に広島経済大学にはどのような問題があり、何を改善しなければならないのかを考察し、広島経済大学の問題点を明確化する。最後に第 4 章で、広島経済大学の問題点に対しての対策を考察し、大学改革の方法として自分なりの考えを述べる。この論文が、広島経済大学をはじめ様々な私立大学の質の向上に少しでも役立てればと思う。

¹ 正確には「独立行政法人」

2. 私立大学の現状

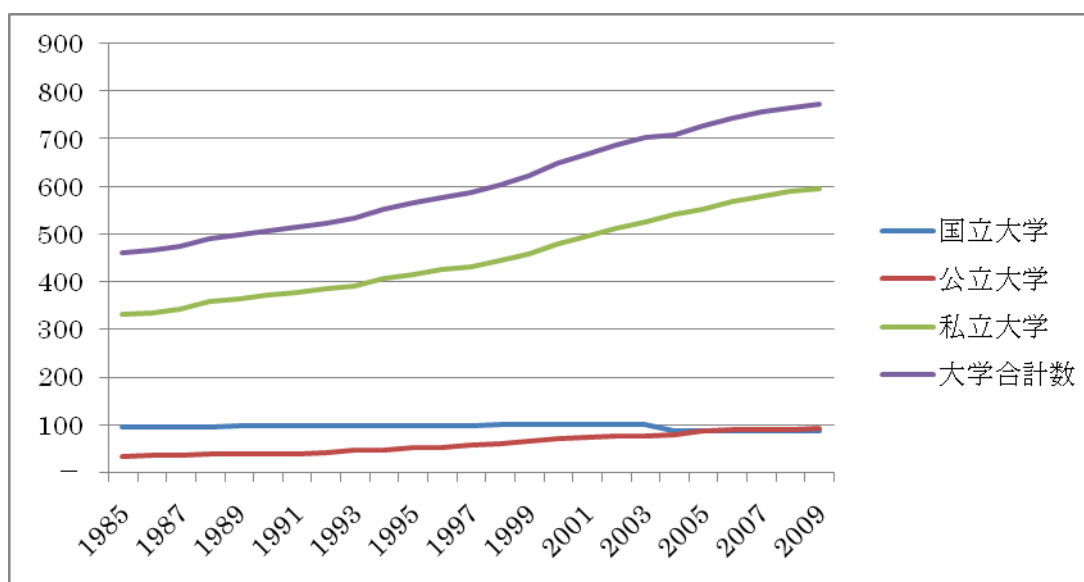
本章では、今現在の私立大学の実態を見ることで、大学が淘汰される時代となった背景、危険性などを明確にしたい。いかに大学が崩壊する時代が目前に迫っているのかが分かるだろう。

2. 1 大学の増加と学生の減少

第 2 節では大学全入時代に突入しつつある現状を理解してほしい。なぜこれから大学が淘汰されていく時代に突入するのかが分かっていたらと思う。

図 1 を見て分かるとおり、大学数は年々増加傾向にあったことがうかがえる。1985 年で 460 校だった大学数は 2009 年には 773 校に増加した。その背景には大学の多様化を促進するために施行された文部科学省（旧：文部省。以下同様。）の政策にある。その政策とは、1991 年に行われた同省による大学設置基準の改正である。これにより従来の大学設置規定が大幅に削減された。この規制緩和をかわきりに大学数は飛躍的に増加していったのである。特に私立大学の伸びは驚異的なものとなっている。図 1 を見ても飛躍的に伸びていることがうかがえるが、実際設置基準改正前の 1990 年度の 372 校に比べ、2009 年度には 595 校と大幅に増加しているのである。これらの要因は、設置基準の規制緩和はもちろん、文部科学省の手厚い保護のもと、不況知らずの存在として大学経営が確立されつつあったことにある。そしてそれが、今現在のような私立大学の飽和状態に繋がっているのである。

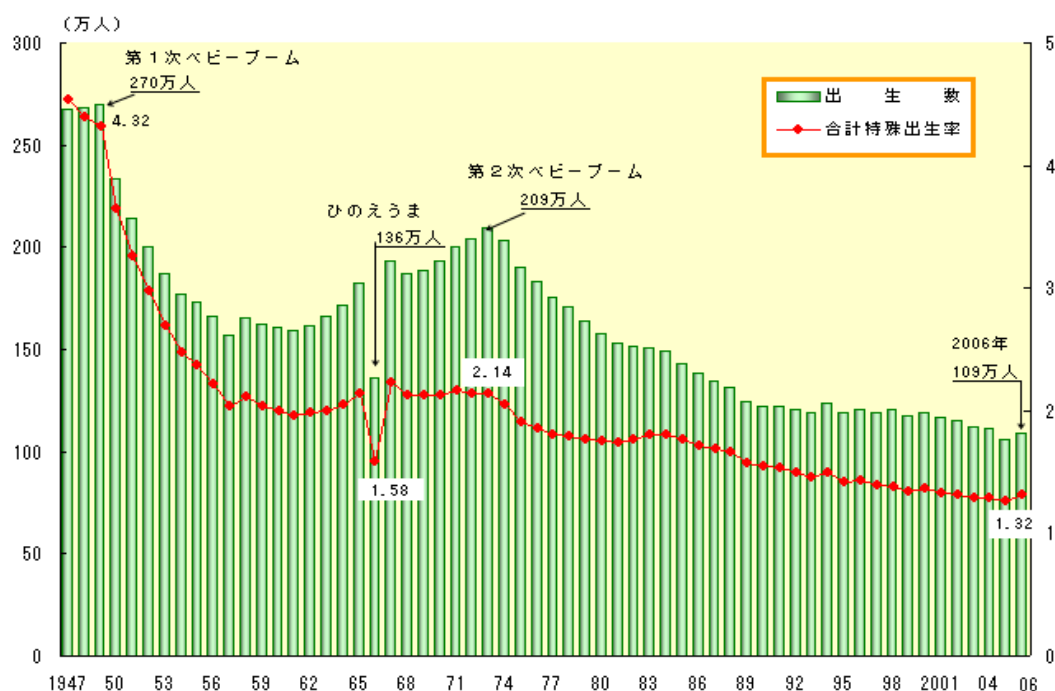
図 1 学校数の推移（1985～2008 年度）



引用：文部科学省「学校基本調査報告書」より作成
さて、ここで問題となるのが少子化の影響である。図 2 を見て頂ければわかると思うが、

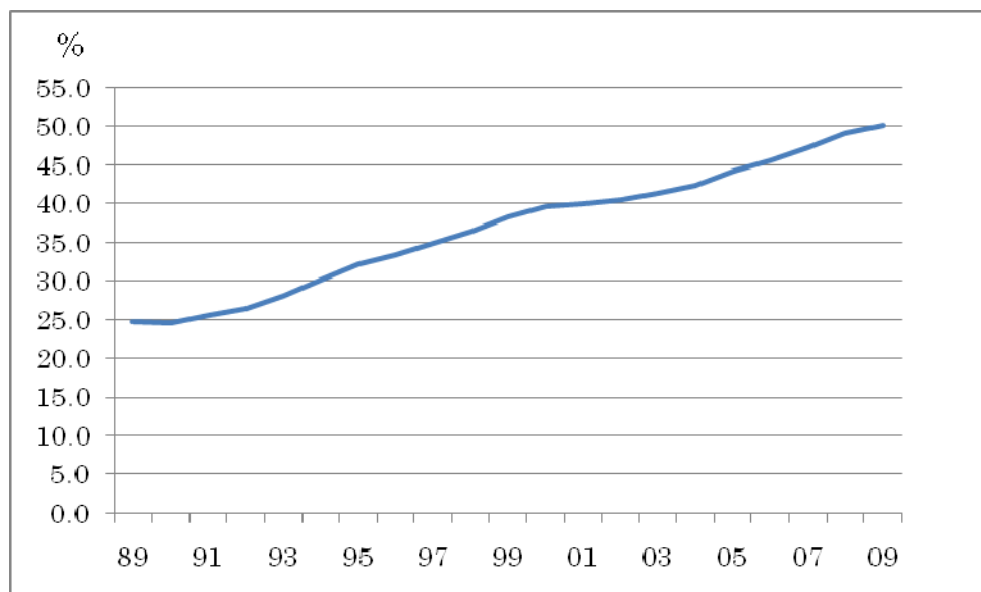
大学が増加してきたのにも関わらず出生率の低下により若者の人口は年々減少している。当然それは学生の減少にもつながると考えられる。しかし、図 3 で分かるとおり大学への進学率は年々上昇傾向にあることがわかる。当然これは、大学を卒業していないと就職が困難であったり、就職後の給料面や出世などにも高卒と比べ大きな差が生まれるという現代社会の風潮から来ているのだろう。しかし、大学への進学率上昇の要因はただ単純にそれだけではない。図 4 を見て分かるとおり、短期大学への進学率が急速に低迷している。このことから、従来短期大学へ入学していた学生が 4 年生大学への入学へとシフトしていることがうかがえる。その裏付けとして、もともと短期大学だった大学も低迷を受け 4 年制大学へと移行している現状がある。ここで、図 5 を見て頂きたい。これは、私立大学の学校数と学生数の推移を比較したものである。上記でも説明したとおり大学数は年々増加しており、それに伴い学生数も増加する傾向にあった。しかし、近年その比例の関係は崩れつつあることがわかる。大学数は依然増加傾向であるのに対し、学生数は横ばいへと移行している。つまり、単純に大学への進学率は上昇しているものの、それを上回る少子化による学生数の減少が大学経営に多大な影響を及ぼしていることが言えるのである。

図 2 出生数の推移



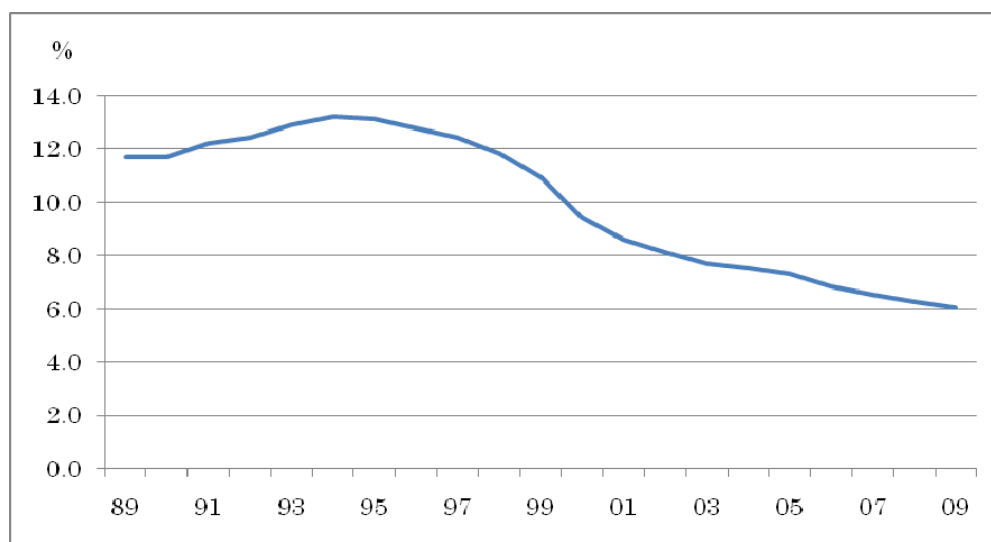
引用：「人口動態統計」厚生労働省大臣官房統計情報部

図 3 4年制大学への進学率の推移



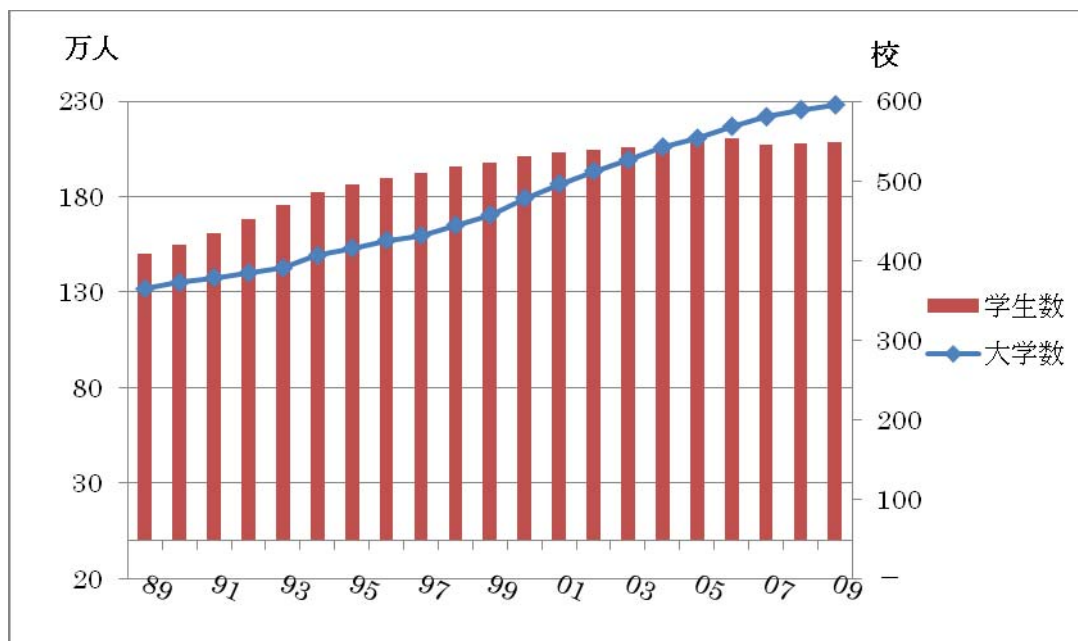
引用：文部科学省「学校基本調査報告書」より作成

図 4 短期大学への進学率



引用：文部科学省「学校基本調査報告書」より作成

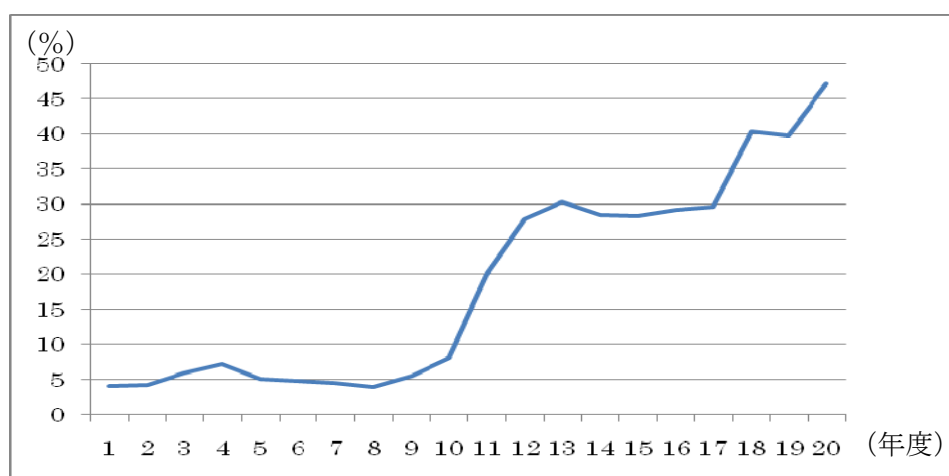
図 5 私立大学の大学数と学生数の推移



引用：文部科学省「学校基本調査報告書」より作成

では、少子化に伴い今現在私立大学ではどれほどの影響が出ているのだろうか。図 6 では定員割れとなっている私立大学の割合を示している。それによると四年制私立大学 565 校の 47.1% に相当する 266 校で入学定員充足率が 100%未満。すなわち、入学定員を満たしていない「定員割れ」の状態となっているのである。これは非常に深刻な問題である。今存在する 4 年制私立大学の半数近くが「定員割れ」に陥り、さらにこれから少子化が進むと予想されるため、ますます私立大学の経営難に拍車をかけることが懸念されるのである。

図 6 私立大学定員割れ学校数の割合



引用：日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター資料より作成

私立大学の数は増加の一途を辿り、一方で出生率は低下し続け、学生にあたる若者の数は年々減少している。今現在ですら定員割れしている私立大学は約半数に上るのだから、これから急激な勢いで大学が淘汰されていくのは、もはや誰の目にもあきらかと言えるだろう。そこで次の第3節では、大学の質向上のために各大学では実際にどのような取り組みをしているのかを見ていく。

2. 2 私立大学の様々な取り組み

上述してきた通り、大学間での合併や定員割れなどの大学が増加し、私立大学間の生き残りをかけた競争が激化している。本節では、このような現状の中、各私立大学ではどのような取り組みを行っているのかを見ていく。このことで、広島経済大学がより良い大学となるための糸口をつかみたい。

2. 2. 1 ユニークな学部・学科を持つ大学

私立大学の様々な取り組みを調べていくうちに、多種多様な取り組みが見られることがわかった。まずはじめに他大学には無いユニークな学部・学科を新設することで差別化を図っている大学を紹介していく。表 1 特異な学部・学科を開設している大学 は得意な各部・学科を開設している大学の一覧である。

表 1 特異な学部・学科を開設している大学

大学名	学部・学科	概要	設置年度、定員
明海大学	不動産学部	不動産鑑定士、宅地建物取引主任者、など不動産業界の有資格者養成。不動産業のスペシャリストを担う。	1992 年 250 人
立教大学 札幌国際大学 北海学園北見大学	観光学部	旅行業、宿泊業、交通業など観光関連分野でのリーダーシップをとる人材育成	・立教大学 1998 年 330 人 ・札幌国際大学 1999 年 150 人
名古屋文理大学	情報文化学部 PR 学科	2008 年 4 月 PR 学科開設。自分自身をマーケティングすることで他人と差別化し、自分を社会に売り出していく能力を身につける。定員 80 人に対して	2008 年 80 人

		1 期生 8 人。	
北陸大学	未来創造学部	幅広い分野をつなぐ人材を育成。経営、経済、金融、法律、政治、スポーツ、文化など、15 の学習領域から複数を学ぶことができる。	2004 年 200 人
デジタルハリウッド大学	デジタルコミュニケーション学部	映画・CG・ゲーム・アニメ・Web・IT と英語を学び、国際社会での活躍を目指す！	2005 年 250 人
宇都宮共和大学	シティライフ学部	市民生活のさまざまな課題を解決し、物心共に豊かな近未来の都市創造のために、総合的に市民のライフデザインをコーディネートできる人材を育てる。	2006 年 170 人

このようにユニークな学部を新設することで他大学との差別化を図る大学は少なくない。しかし、これらの取り組みが果たして学生のニーズを掴み、大学の質の向上に繋がっているのだろうか。そこで、上記のような新たに特異な学部・学科を開設したことによる効果を検証したい。だが、実際に各大学の講義内容や雰囲気を知ることが、各大学のシラバスやホームページを参照したところで限度がある。そこで、各々の大学の受験者数・合格者数・入学者数から、「志願倍率」、「受験者数に対する合格者数の割合」、「合格者数に対する入学者数の割合」を考慮することで、新たな学部・学科を新設することで学生数増加などの効果があるのかを判断する目安とする。

	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	定員
明海大学	116	95	41	1.2	250
立教大学	3733	772	304	4.8	330
札幌国際大学	50	50	26	1	150
北陸大学	38	36	186(総数)	1.1	200
デジタルハリウッド大学	123	74	31	1.7	250
宇都宮共和大学	395	326	56(総数)	1.2	170

2. 2. 2 特徴的な教育を実施する大学

本項では、一般的な大学教育だけではなく、特徴的で面白い教育を実施している私立大学を紹介していく。ただし、ここで言う特徴的教育とは、ある特定分野に特化した人材育成を主とする高等専門教育を指すものではない。現在の大学の教育課程は、未だに高等専門教育のような昔からの伝統的な考えに沿って構成されている大学が多い。しかし、進学率が6割になろうとする今、「大学」というものは、もはやエリートのものではない。マス（一般大衆）のものへと変化したと言っていいだろう。社会の特定分野の人材を養成するというよりも、社会への通過点となったのである。つまり、これからの大学は特定分野の専門家育成ではなく、社会人基礎力を学ぶ場として確立していかなければならないと考える。社会人としてマルチな能力が必要とされる現在において、どのような教育が正しいのか。各大学の特徴的教育を見ていくことで、広島経済大学の質の向上に繋ぐ糸口を見出すことができると考える。

<玉川大学>

まず始めに紹介するのは、東京都町田市にある玉川大学である。ここは非常にユニークな教育で知られている大学で、大学であるにも関わらず学級担任の先生がいてクラスもある。1年次は10月の体育祭と12月の音楽祭が全員参加の必修となっている。体育祭では1年次生約1900人全員が、練習してきた体操を一斉に披露する。音楽祭では、ベートーベンの「歓喜の歌」を600人ずつで合唱。全学生が4カ月も前から練習を行うという。さらに、同大学の学園祭（コスモス祭）も他の大学とは一風変わっている。ごく一般的な大学祭というと、サークルやゼミによる模擬店と、ステージ上での音楽演奏やお笑い芸人のショーやミスコンなどを開催しているものだろう。しかし、玉川大学のコスモス祭は、非常に学術的な大学祭である。上記のような一般的な大学祭の催し物に加え、学生が学部ごとに充実した研究成果を披露してくれるのである。学生たちは教室を飾り付け、来場したお客様に研究説明をする。ゼミごとの展示も充実しており、文学作品研究から国際問題まで、多彩なテーマのゼミ展示がなされている。

写真1 玉川大学の各イベントの風景



引用：玉川大学ホームページより

同大学では、このような全員で何かを成し遂げるという教育を「全人教育」と名付けている。私は、この教育方針に非常に感銘を受けた。確かに、1年生全員が必修で参加する体育祭や音楽祭は、悪く言えば強制で、大学の代名詞とも言われる自由性が損なわれると揶揄されるかもしれない。しかし、「大学」は自由で学生自身が自ら進んで勉強する場であるから、自ら何もやらなかった、もしくはできなかった学生は、本人が悪いとして切り捨てる大学が果たして正しいのだろうか。なにも私は強制的な教育を勧めているわけではない。強制して全てをさせるわけではなく、学生が自ら考えて行動し、自発的に勉強するようなきっかけ（プログラム）を大学側が提供する必要があると考えているのである。そのきっかけが例え強制という形であったとしても、それが学生のために必要なことであれば正しい教育ではないだろうか。玉川大学にはそのような正しい教育があると強く感じる。

<金沢工科大学>

次に紹介したいのは石川県にある金沢工業大学である。同大学では「教育付加価値日本一の大学」をテーマに掲げ、非常に教育熱心な大学として知られている。数々の表彰を受けていることでも有名であり、文部科学省が各大学の教育改革の取組の中から、「優れた取組」（「Good Practice」略称「GP」）を選定する平成 21 年度「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラムにおいても、金沢工業大学が選定されている。金沢工業大学は今回の選定で、平成 15 年度に GP 制度が開始して以来、7 年連続 12 件目の選定となり、その成果は全国の国公立私立大学でもトップクラスに位置している。また、朝日新聞出版の「大学ランキング 2010 年版日本の大学 745 校完全ガイド」でも、全国の大学学長が制度や成果で注目している大学として、金沢工業大学は「総合」2 位（私立大学中 1 位）、「教育分野」5 年連続 1 位、「研究分野」18 位（私立大学中 5 位）にランキングされている。では、これほどの高い評価を受けている理由とはなんなのだろうか。その詳細な部分に迫っていくことにする。

金沢工業大学を調べていて、まず驚いたことは学内に「工学基礎教育センター」と呼ばれる学内塾のようなものが存在するということである。この施設では、工業大学に入学したものの、物理や数学の知識に欠ける学生を、教養科目を担当する教師たちが学生の学習熟度に合わせて直々に指導してくれる。近年、大学の偏差値低下により、大学そのものが敷居の高いものではなくなった。その結果、高校までに身につけておかなければいけない基礎学力がない、学習する意欲のないまま大学に入ってくる、大学での勉強に必要な知識がない、などの学生が急増している。このような現状を踏まえ、金沢工業大学では高校レベルの基礎から、講義だけでは理解できなかったところの復習、さらには講義内容より一步踏み込んだ内容まで、学生のニーズに合わせて個人指導をしているのである。そのため、金沢工業大学の教員は講義以外のある一定時間以上を、学生に対して指導する時間に充てることが大学側から義務付けられている。また、「教育付加価値日本一」を掲げるだけあって、教員の教育指導にも大きく力を入れている。教員の指導力が無ければ、このよう

な施設はあまり意味をなさない。しかし、教育指導に力を入れているからこそ、学生も自ら進んで学習に臨むのだろう。実際に「工学基礎教育センター」の年間利用学生数はのべ15000人以上と、この施設の必要性がうかがえる。

さらに、金沢工業大学には「夢工房」と呼ばれる面白い取り組みがある。夢工房とは工学に関わる全てのことを学生が自由に創作できる場であり、「夢を考えて形にする場」、「知的な感性工作空間」という理念のもと1993年7月にスタートされたものである。現在ではソーラーカー、人力飛行機、ロボット、ロボカップ、電気自動車など、計16のプロジェクトが存在し、学生が主体的に活動している。この施設には工学に必要な機材は全て揃っているほか、専門家の技術者が常駐しているため、技術面の指導や安全面の確保など万全の状態である。また、この施設の利用には申請も必要なく、気が向いた時にいつでも利用可能なため、学生としては煩わしい手間が省かれ意欲的に取り組めるのである。

写真2 夢工房の外観



そして、そのほとんどのプロジェクトが全国大会や世界大会で活躍している。コンテストでは、いわゆる一流大学や有名大学が多数参加するにもかかわらず、決して偏差値が高いとは言えない金沢工業大学が他の大学を打ち破っているのである。その強さには、それなりの理由があった。今回は数あるプロジェクトの中から、ソーラーカープロジェクトに着目し紹介したいと思う。

引用：金沢工業大学ホームページより（以下同様）

ソーラーカープロジェクトでは、車体からタイヤ、メカニクス、に至るまでの設計や製作を学生たち自らの手で行う。もちろんレースでも、ドライバーやピットスタッフ、支援

写真3 夢工房で活動する学生



スタッフなどすべて学生なのである。ソーラーカーに関わる全てのことを学生自身が考え、チームとして意見を出し合い築き上げていかなければならない。当然そこには、学年、性別はもちろん、育った環境や、価値観、考え方などの異なる様々な個性の人間と協調していかなければならない。個々のメンバーが考えていることや実現したいことは当然異なるため、時には正面からぶつかり、時にはお互いの意見を尊重しあいながら、良いものを築き上げていくのである。

ここに金沢工業大学の強さがうかがえると私は思う。国立大学や有名大学などの偏差値の高い、いわゆる「エリート」集団に勝つ要因として、彼らはこのプロジェクトを通して知識だけでなく人間力が育成されているからではないだろうか。集団でなにか1つのもの

を完成させることは非常に難しい。人間関係という最も難しい問題が壁となるからだ。数年にわたる長い間、チームのメンバーとほぼ毎日顔を合わせ、意見をぶつけあう。そこで彼らは、自己を主張する能力や協調性、コミュニケーション能力や団結力、リーダー性など様々なことを学ぶのだろう。今現在の大学生でここまでの体験ができている学生がどれほどいるだろうか。金沢工業大学の教育が数々の高評価を獲得し、他大学からも認められているのはもはや当然のことと言えるだろう。ゆとり世代の若者は人と群れ合わないとか、人間関係がうまく形成できないと批判される時代となった。しかし、若者を変える、成長させる教育空間の存在さえあれば若者も変わるのではないだろうか。今まさに、金沢工業大学のような教育が求められているのかもしれない。

3. 広島経済大学を考察する

第3章では、広島経済大学を深く考察する。各大学でそれぞれ多種多様な教育がある中で、学生にとってどのような教育が理想なのだろうか。その答えを導き出すためにも、まず本章で広島経済大学の良い点や改善すべき点を考察する。その上で、第4章の広島経済大学の改革につなげたい。

3. 1 経済学部という単一の学部

広島経済大学は、その名の通り経済学部という単一の学部のみしか存在しない。一般的には複数の学部で構成された大学が多い中で、単一の学部しか存在しないことのメリット、デメリットを考察する。

3. 1. 1 単一学部のデメリット

複数の学部で構成される大学が多い中で、経済学部という単一の学部しか存在しないことの問題点とは何だろうか。まず考えられるのは、他大学に比べかなり限られた教育しかできないことだろう。学生の中には医者であったり、科学者や弁護士であったり様々な将来の夢を抱いて大学に進学してくる者が多い。そのために医学部や農学部、法学部などそれぞれの夢に沿った学部のある大学へと進学する。しかし、複数学部存在する他大学では、その様なニーズに合わせた学生確保が実現できるかもしれないが、単一学部である広島経済大学ではそのような学生を確保することはできない。つまり、この時点で既に、広島経済大学の入学を希望する学生はかなり絞られた状況にあるのだ。

写真4 広島経済大学メディア館の外観



引用：広島経済大学ホームページより（以下同様）

また、経済学部という学部は上記で挙げた医学部、農学部、法学部などのような専門性のある学部ではない。それらの学部ではそれぞれ専門的分野の道が開かれているが、経済学部を卒業したからといって、どこか一定分野の就職を有利にさせるという要因にならないのである。その点でも学生を確保する妨げとなるだろう。

3. 1. 2 経済学部という単一学部であることのメリット

では、経済学部という単一の学部であることのメリットとは何だろうか。それは、上記で述べたデメリットの逆説的考えになるが、一定の特定分野に制限されず、幅広い就職先

への可能性があることではないだろうか。特定分野の学部ならば、それらの道は開けても、他への道は困難になる。しかし、多種多様な企業がある中で、やはり経済学はどの分野の企業にとっても必要なこと。つまり経済を学ぶ経済学部であれば、圧倒的有利な分野は無いにせよ、制限される分野もないのである。未知数な将来的選択肢が多々存在するという面においては、就職を考えただけでメリットとなり得ると考える。また、経済学部は留学生からの人気が高い。日本の経済を学びたいという留学生は多く、その学生確保にも繋がっているのである。これらが経済学部のメリットであろう。

3. 1. 3 新たな学部・学科を新設するという考え

経済学部には未知数な将来的選択肢が残っているというメリットはあるにせよ、単一学部によって学生確保がかなり絞られてしまうというのは事実である。そこで、新たに学部・学科を新設することにより狭められた制限を緩和し、学生の多種多様なニーズに合わせるということも 1 つの打開策として挙げられるだろう。しかし、私はそのような提案には反対である。なぜなら 2. 3. 1「ユニークな学部・学科を持つ大学」で述べたとおり、新たな学部・学科を新設することが、実質的な大学の質の向上や運営の改善に繋がっていないことは実証済み（**仮定**）だからである。

さらに、新たな学部を新設するにあたっては、莫大な費用と共に、教員も増員しなければならない。なぜなら、1つの学部に対して決まった人数以上の教員を配置しなければならず、新たな学部を新設することで、さらなる教員の増員が必要となるからである。私は、教員を増員し、莫大な費用をかけてまで新たな学部を新設することに、大きなメリットはないと感じる。

それならば、逆にこの経済学部という単一の学部しかないことのメリットを最大限に活かすことの方が効果的だと考える。つまり、幅広い選択肢を最大限に生かし、就職率の高い大学を目指すという方向である。しかし、単に数値的な就職率の高い大学を目指すのではない。実質的に企業から大きな評価を得、認められ、広島経済大学の学生が欲しいと言われるような大学にならなくてはならないと感じる。

3. 2 興動館教育プログラム

広島経済大学では「ゼロから立ち上げる」興動人の育成に力を入れている。変化の激しい不透明な時代となった昨今、「人に言われてはじめて動くような“待ち”の人間」は求められない。既成概念にとらわれることなく、ゼロからものごとを考え、失敗を恐れず、他人と協働して何かを成し遂げる人材が求められているのである。そのような人材を広島経済大学では「興動人」と呼ぶ。そして、その興動人育成のために、広島経済大学では多数のプログラムが実施されている。本節では、その内容を紹介していく。

3. 2. 1 興動館プロジェクト

興動館プロジェクトとは、学生が主体的に取り組み、ゼロから立ち上げるプロジェクトのことを指す。このプロジェクトの遂行には、多くの学生が集まり、そこではさまざまな葛藤が生まれる。他人と協力共同しながら何かを成し遂げていくことで、学生たちは知識だけでなく感情レベルや表現レベルでの暗黙知²が育まれる。多くの人と何かをやり遂げた経験を持つ人間は、企業にとっても魅力的な人材となるであろう。ここでは、海外、国内含め主なプロジェクトをいくつか紹介する。

① インドネシア国際貢献プロジェクト

姉妹校であるインドネシア共和国のガジャマダ大学の学生と協力し、インドネシアの2006年5月に起きたジャワ島中部地震の復興支援を通じてインドネシアへの国際貢献を図るプロジェクト。国内での募金活動だけでなく、メンバーが実際に現地へ渡って災害に苦しむ人々を支援するなどの活動を自発的に展開している。（参照：写真5 インドネシア国際貢献プロジェクトの活動風景）

写真 5



② 子供たちを守ろうプロジェクト

写真 6



安全な環境づくりを目指す。（参照：写真6 子供たちを守ろうプロジェクトの活動風景）

不審者が学校に入り凶悪な犯罪が起こるなど、子どもが被害者となる事件が少なくない。こうした現状を憂慮し、「子どもを守る地域社会の創造」という目標を掲げ、安心して住みよい街を具体的に提案するプロジェクト。「学生の立場や視点から何ができるか」を探し出し、実際に行動することをテーマに、子ども達や地域の人々とのさまざまな交流を通じて

²※暗黙知...何度か失敗を繰り返し、やがて自分の内面に言葉としてではなく、取り入れられた「知識」

③ 中国植林プロジェクト

近年、地球温暖化により、中国内モンゴル自治区では、砂漠化が進行している。その影響で日本でも黄砂の被害が出ている。こうした現実を受け、植林活動を実施し、地球環境保護に貢献することを目指す。平成 19 年 8 月には内モンゴル自治区を訪問し、ボランティア団体の指導を受けながら、植林活動を行った。

④ カフェ運営プロジェクト

「カスタマーファースト～地域とともに～」という事業理念の下、学生が主体となってカフェ“HUE café Time”をゼロから立ち上げ、運営していくプロジェクト。サービスの提供はもちろん、スタッフの教育や食器のセレクション、メニューの開発、予算管理など、店舗運営に関わるすべてをメンバー自らが行う。それらにともなって発生する課題を解決する中で、ビジネスに必要な人間力を育む。（参照：写真 7 カフェの店内風景）

写真 7



このように学生が主体となって活動するさまざまなプロジェクトが多数存在する。学科や学年の異なる仲間たちと「ゼロから立ち上げる」経験を共有する中で、課題や失敗を克服し、企画力や行動力、コミュニケーション能力や精神力を養うことができると私は考えている。学生主体とは言っても学生だけでは困難な場合も当然ある。そのような場合は大学側からも支援をして頂ける。専属のコーディネーターがサポートするほか、活動スペースとして「興動館」を開放し、チームごとのブースも提供している。

さらに、学生が企画して大学が公認したプロジェクトには、最高 1,000 万円の資金を援助。大きなプロジェクトの成功を目指してチャレンジする体験は、学生を大きく成長させることはもちろん、社会人として就職後も大きな力として繋がると考える。

3. 2. 2 興動館科目

新しい企画や目標を掲げて「ゼロから立ち上げる」興動館プロジェクトを支えるために、「興動館科目」を自由選択科目として開講している。学生に「経験」や「実践」の場を提供し、実際にプロジェクトのリーダーやメンバーとなってプロジェクトの成功に寄与する力を育む。そのために主に以下の 4 つのフィールドから構成されている。

表 2 興動館科目の基本概念



引用：広島経済大学ホームページより

では、それぞれのフィールドを簡単に紹介していく。

<元気力フィールド>

「元気力」とは、自らの可能性を引き出し、新しいことにチャレンジするためのパワーのこと。このフィールドの授業では、人との関わりの中で「自分の長所」を発見することを目標としている。

達成目標

1. 失敗から元気に立ち上がるための意欲・気概を持つ。
2. 自分の長所を発見し、自分の将来に展望を持つ。

授業方法

学生相互の発言を促し、それらを否定せず、意見の良さを認め励ます。

実施科目

- ・ わが人生の転機Ⅰ(教職員編) (担当教員：平本賢了・林晶子)
- ・ わが人生の転機Ⅱ(同窓生編) (担当教員：石田恒夫・安藤幹夫)
- ・ 「笑い」のパワー・生きる力 (担当教員：生塩睦子)
- ・ 愛の講座 (担当教員：松井一洋)
- ・ 個性がはじける朗読 (担当教員：蔭山武人)
- ・ 経済を振り返る (担当教員：竹林栄治)
- ・ 生きがいくりの作戦会議(担当教員：中村克洋)

<企画力フィールド>

新しい企画を立てることはもとより、無から有を生み出す創造力。それが、このフィールドで身につける「企画力」である。加えて、企画力を支える粘り強い精神力や情報収集の技術、判断力なども育成。総合的な力の養成を目指す。

達成目標

1. 無から有を生み出す創造力を持つ。
2. 企画書に基づいて、その企画を相手に説得する力を持つ。

授業方法

テーマに沿ってさまざまなアイデアを引き出し、一つの企画にまとめさせる。

実施科目

- ・ バーチャル株式投資で学ぶ企業分析と経済学 (担当教員：小西修一・村山秀次郎)
- ・ 瀬戸内海地域の魅力を発信しよう (担当教員：濱田敏彦)
- ・ 企画力養成講座 (担当教員：長谷川泰志)
- ・ 経営実践 (担当教員：永田靖)
- ・ 新読書ナビゲータ (担当教員：中村克洋)
- ・ みんなで教材と創ろう
- ・ プロスポーツによる広島活性化講座
- ・ 「私たちの広島」フォトカルタづくり

<行動力フィールド>

「行動力」とは、失敗を恐れることなく挑戦する実行力。このフィールドでは、実践することを通じて知識や技術を自分の力に変えていき、小さな成功体験を積み上げながら着実に行動力を養うことを目指す。

達成目標

1. 無から有を生み出す創造力を持つ。
2. 企画書に基づいて、その企画を相手に説得する力を持つ。

授業方法

テーマに沿ってさまざまなアイデアを引き出し、一つの企画にまとめさせる。

実施科目

- ・ バーチャル株式投資で学ぶ企業分析と経済学（担当教員：小西修一・村山秀次郎）
- ・ 瀬戸内海地域の魅力を発信しよう（担当教員：濱田敏彦）
- ・ 企画力養成講座（担当教員：長谷川泰志）
- ・ 経営実践（担当教員：永田靖）
- ・ 新読書ナビゲータ（担当教員：中村克洋）
- ・ みんなで教材と創ろう
- ・ プロスポーツによる広島活性化講座
- ・ 「私たちの広島」フォトカルタづくり

<共生力フィールド>

「共生力」とは人と協力して物事を達成する力。このフィールドではボディランゲージや演劇などの多彩な手法を採用。学生が自分に最適な自己表現や人間関係を構築するための手法を発見することを目標としている。

達成目標

1. 他者を共感的に理解する力を持つ。
2. 豊かな自己表現力を持つ。

授業方法

多様な価値観を持つ集団の力を使って課題を達成させるとともに、そのプロセスを学ばせる。

実施科目

- ・ 広い世界に飛び出そう（担当教員：G.R.ハラダ・山本貴裕・三須祐介）
- ・ 人を動かすことばと話し方（担当教員：中村克洋）
- ・ 英語のビデオキャストで「日本」を紹介しよう(担当教員：P.Walsh・濱田敏彦)
- ・ 楽しく学ぼう！ディベート(担当教員：前田利子・成定正子)
- ・ 国境を越える人々（担当教員：小野増平）
- ・ ウォッチひろしまー呉ーイワクニ（担当教員：小野増平）
- ・ ゲームを通じてグローバル社会を理解しよう（担当教員：広田堅志）
- ・ 人・人間・人間関係（担当教員：平澤知穂・小方昌子）

上記の 4 つのフィールドで学ぶことができる、意欲的姿勢、チャレンジ精神、企画力、行動力、共生、コミュニケーション能力などは全て、社会に出てから必ず必要な能力である。そして、社会人になるための通過点、すなわち準備段階としての「大学」において、本来なら「卒業」イコールこれらの能力を身に付けていることが絶対条件となるだろう。しかし、私を含め多くの大学生がそのような能力を身に付けないままを卒業しているというのが現実である。

このことから、これからの大学教育において大事なものは、社会人として必要な能力（社会人基礎力）を全学生に対して身に付けさせることだと考える。幸運にも広島経済大学には、そのような能力を身に付ける環境が十分に整っている。しかし、その環境を最大限に活かすことができていないというのが広島経済大学の現状であり、問題である。どういうことかというと、せっかく優れた環境があるのにもかかわらず、そのプログラムに対して積極的に参加する学生が非常に少ないということである。本節で説明した興動館プロジェクトでは、学生参加者がわずか 392 名（平成 21 年 12 月 10 日現在）である。広島経済大学の全学生数が 3997 人（平成 21 年 5 月 1 日現在）であることから、全学生のわずか 1 割足らずの学生しかこの興動館プロジェクトに参加していないのが現状だ。また、興動館科目も同様に（このあたりで興動館科目を履修できる（制限）人数が少ないこと、ひょっとしたら履修制限人数よりも実際履修した人数が少ないのではないかという期待を込めて、問題点としたいと思います・・・。今調査中）さらなる大学教育向上に向けていきたいと考える。

3. 3 大学と教員の教育に対する熱意

私は現在大学 4 年生だが、これまでの大学の講義を通して、大学、そして教員の方々の教育に対する熱意があまり感じられないと懸念していた。それは、「教育付加価値日本一」を目標に掲げる金沢工業大学からも、その気持ちをさらに強いものにした。しかし、これは広

島経済大学だけではなく、日本の多くの大学がそのような問題を抱えているのだろう。だからこそ、教育に力を入れている金沢工業大学が数々の賞を選定されている。しかし実際、金沢工業大学の教育は欧米では多くの大学が実施している。日本の大学教育の水準が低いからこそ、日本では同大学の教育が非常に素晴らしいと評価されているのだろう。つまり、日本の大学全体が教育に対する熱意が低いと容易に判断できる。

私は教育に対する大学、そして教員の姿勢を、必ず変えなければならないと考えている。この教育に対する熱意について私は常々疑問に思っていたことがある。大学を 1 つの企業と考えた場合、収入源である顧客は学生である。本来企業であれば顧客の満足度を重要視するはずである。当然それは、顧客が満足しなければ次の仕事は無くなり、企業としても運営が不可能になるからである。しかし、大学だけは異質だ。大学は教育機関であるため、顧客である学生の教育的な満足度を重要視しなければならないはずである。しかし、大学、そして教員にそのような姿勢はあまり感じられない。学生の満足度は決して高くはないはずなのにも関わらず、依然として一方通行の講義を行う教員が多いと感じる。

その理由として考えられるのは、「教育」よりも「研究」に重点を置いているからではないだろうか。研究で評価されれば給料や待遇面で優遇されるほか、外部からの評価も上昇する。それに対して教育に対する待遇は著しく低いことが懸念される。教員が教育に力を入れ、学生から評価されたとしても待遇されず、大した評価も得ることができない。つまり、「教育」に力を入れる教員が損をして、「教育」を怠って「研究」に力を注ぐ教員が得をする仕組みがあるのである。だからこそ、教員は教育に熱が入らず、今までのような学生が満足のできない教育が行われてきたのではないだろうか。広島経済大学に関わらず、日本の多くの大学がこのような仕組みで運営されていることが大きな問題である。教育をさらなる質の良いものにするためにも、この問題点を解決しなければならないと強く感じている。

3. 4 学生の勉学に対する姿勢

4. 広島経済大学改革のために

本章では、今まで各章で述べてきたことをもとに広島経済大学がより良い教育となるために、また、大学経営のさらなる向上に向けての改革案を述べる。

4. 1 広島経済大学が目指すもの

本節では、今まで論述してきたことをまとめ、広島経済大学がこれから目指す理想の姿を考えていきたいと思う。

まず、3. 1 で述べたとおり学部・学科を新設することは、あまり効果的ではないと考えている。学部や学科を新設することで、学生数が少なからず増加するなどの効果は見込まれるが、それに伴う資金の増大と、新たな教員の増員が必要となり、効果に対しての負担が大きいと感じる。また、学部・学科を新設することは、実質的な教育の質や大学経営の向上に直接的な解決にはならないことは検証済みである。そこで、経済学部という単一学部のメリットを最大限に活かし、就職力のある大学を目指すことが必要だと考える。しかし、上述した通り、単に数値的な就職率の高い大学を目指すのではなく、実質的な就職力の向上を目指す必要がある。理由として、広島経済大学は既に中四国でもトップレベルの就職率にも関わらず、学生自身は決して就職力のある大学だと感じてないからである。企業からも広島経済大学の学生が欲しいと思われる程評価を頂いているようには感じない。だからこそ、就職率の高い大学を目指すのではなく、実質的な就職力の向上を目指すのである。「就職力のある大学」という実績を残すことができれば大学として大きな武器となるだろう。受験生も大学を選ぶ選択肢の一つとして「就職力がある」ことは非常に魅力的である。このことから「就職力のある大学」を目指すことで学生確保にも繋がり大学経営も向上するのである。また、当然就職力を向上するためには、教育力の向上が絶対条件となる。大学改革の柱として、教育の実質化が必要だと感じるため、就職力のある大学を目指すことが教育的な改革にも繋がると考えている。

さらに、私の理想として、学生を絶対に見捨てない大学を目指していただきたいと感じている。日本の多くの大学生が、大学という自由な環境に悪い意味で順応してしまい、自ら勉強もせず、目的も無く、何のために大学に在学しているのかもわからないまま卒業している学生が多々存在する。しかし、大学側は本人の責任として何もしようとしない。近い将来、学生が大学を選ぶ時代が来る中で、そのような大学はこれから必ず生き残っていかない。もっと入学した学生に責任持ち、学生を成長させる場としての大学として確立していかなければならないのである。

4. 2 実質的な就職力の向上

私は実質的な就職力の向上が、大学の教育面、経営面などの「大学の質の向上」に繋がると考えている。本節では、この大学改革の本題とも言える実質的な就職の向上のために何をすべきかを述べていく。

4. 2. 1 必修制度の拡充

前述した通り、私は広島経済大学において実質的な就職力のある大学を目指すことが大学改革の大きな柱と考えている。しかし、そのためにまず教育の改革が必要になってくる。なぜなら、「教育」という大学の基盤を見直さなければ就職力の向上に繋がらないからである。そこで、ここでは教育の実質化のための具体策を提案する。

まず大学の理念として、大学とは研究機関であると同時に教育サービス機関でもあることから、入学した学生全員に等しく平等に教育的付加価値を提供しなければならないと考える。これは、高校での基礎学力ができていない学生や、勉学に対してやる気が無く自ら進んで学習しない学生など様々な学生が存在する中で、誰 1 人見捨てない教育が必要だということである。前述したが、目的も無く、何のために大学に在学しているのかもわからないまま卒業している学生が多々存在する。そんな中、大学に進学させる親御さんや高校の先生方は、進学させるにあたって本人が大学で真つ当な教育を受け、しっかりとした大学生活を送れるのかが、1 番の心配事だろう。だからこそ「誰 1 人見捨てない教育」を 1 つのキャッチフレーズとして掲げ、実行することで親御さんや高校の先生からも信頼を得られることができると考えている。

そして、その「見捨てない教育」のために私は必修科目の拡充が必要不可欠だと考える。なぜなら 2. 2 玉川大学の特徴的教育で述べたとおり、学生には自ら進んで学ぶようなきっかけ（プログラム）が必要だと考えているからである。そのきっかけを必修とすることで強制という形になるが、私は玉川大学の全人教育から学生を見捨てない、学生のための教育であれば最初のスタートは強制で良い、という考えに至った。当然全てを強制にするつもりはない。社会人としての基礎能力を身に付けるために必要最低限の科目を必修化し、その後は学生自身の自発性に任せ、自ら行動する力を育むという流れである。

では、どのような科目を必修化するのか。当然それは、大学改革の大本である就職力の向上にちなんだ科目が適当だろう。これは、私自身の就職活動を経験して感じたことだが、広島経済大学では就職対策に関する講義がほとんど無い。私はたまたま学内のインターンシップに参加したことがきっかけで、言葉遣いやマナーなどを教わったが、非常に短時間だったため簡単にしか教わるができなかったと感じている。しかし、インターンシップすらも受講していなかった学生は、おそらくネットや本などで自分なりに言葉づかいやマナーなどを学習した程度だろう。就職活動とは本人が努力しなければならないことはもともとだが、大学側としても責任もって支援することが必要だと感じる。そのため、就職

対策科目として、マナー講座や言葉遣い、面接対策やグループディスカッション対策のグループ講義などを必修科目として取り入れるべきだと感じる。そして、従来就職活動全般の役割を担っていたキャリアセンターでは、講義のみでは不安な学生のための就職活動対策ルームとして解放し、さらなる就職支援の場所として確立していくことが望ましい。なぜなら、今現在キャリアセンターが学内全ての就職活動対策を請け負っていると言っても過言ではなく、就職活動が盛んになる時期では常に飽和状態だからである。そのため、面接対策をして欲しい、履歴書の添削をして欲しいと感じたその時点では既に予約が満員で、就職対策支援を受けることができない。これでは、面接まで時間がなかったり、就職活動のため県外に行ったり来たりしている学生にとって、非常に不便であり、就職支援として活用できない。このような現状を踏まえ、就職対策講義などを取り入れることによりキャリアセンターの役割を分散することで緩和し、学生個人個人の就職支援に十分に専念できるようにすべきだと感じる。これならば飽和状態も緩和され、就職活動支援をして欲しいと願う学生にリアルタイムで応えることができるだろう。

さらに、3. 2 で取り上げた興動館教育プログラムについても同様に必修科目にすべきだと考えている。興動館プロジェクト、そして興動館科目は共に、社会人基礎学力を学ぶ最適の場だと感じている。しかし、3. 2 で紹介したとおり、学生の積極的な参加が乏しく、せっかくの良い環境を無駄にしているのが現状だ。これから就職力の向上を目指すにあたって、経済学や経営学などのような専門知識のみではなく、興動館教育プログラムのような社会人基礎学力が絶対的に必要になる。だからこそ、これらの科目を必修化し、全学生に社会人としての基礎能力を身に付けさせなければならないのである。しかしこれでは、興動館プロジェクトの、「学生が自ら主体的に取り組み、学生自身がゼロから立ち上げるプロジェクト」という概念に反することになってしまうかもしれない。でも、考えてみて欲しい。自らある活動がしたいと考えてプロジェクトに参加する学生は本の一部であり、残りの大多数はやりたいという気持ちに至らず、プロジェクトに参加していないのが現状である。それならば、プロジェクトを絶対的に参加しなければならない環境にすることで、様々な経験をさせた方が良いのではないだろうか。そのことで、無理矢理参加した学生もその活動を通して、何かを見出し、自ら何かをやりたいという自発性が生まれてくると考えている。何も経験せず、何もわからないまま終わるぐらいならば、強制という形であってもきっかけを作り経験させてあげることが大事だと考える。学校側としては、きっかけを与え、それ以降は、このプロジェクトの概念どおり、学生の自発性に任せればいいのではないだろうか。だから私は、興動館プログラムを1回生の時のみ必修化し、2回生以降は強制ではなく本人の判断に任せるといった形が良いと考えている。2回生で選択性にする理由として、強制という形では本来このプロジェクトの目的である学生同士が自ら進んで討論し、自己を主張する能力や協調性、コミュニケーション能力や団結力、リーダー性などが生まれにくいからだ。自ら進んで何かをすることで習得することができるこれらの能力を培うためにも2回生以降は学生自身の自主性に任せる必要があるのである。

4. 2. 2 就職活動支援科目

「就職力」というものを考えると、学生が大学生活を通して社会人としての十分な力を養い、企業としてもこの学生を欲しいと思って頂けるような人間性、能力が備わっていることが必要だと言い換えられる。そのための教育として、4. 2. 1 で述べた必修科目の拡充は就職力の向上に向けて必要不可欠なものであると言える。なぜなら就職に必要な社会人基礎学力を全学生に学ばせるための必修化だからである。しかしながら、ただ単に必修化にすることだけでは、就職力の向上には繋がらない。社会人基礎学力としての能力を個々の講義で十分に会得できるような内容でなければならないからである。そこで、それらの就職力向上に向けた科目においては、少人数制にし、教員と学生、または学生同士の双方向のコミュニケーションの存在する講義にする必要があると感じる。なぜなら、双方向のコミュニケーションが無い講義では就職活動支援科目として成り立たないからである。就職対策科目として、マナー講習やグループ討論、プレゼンテーションなどが挙げられるが、これらの社会人として必要な能力を養うためには絶対に学生自らが主体的に考え行動し、教員や学生同士でコミュニケーションをとらなければ得ることのできない能力なのである。しかしながら、私自身、学生生活の4年間を通して学生と教員、または学生同士のコミュニケーションが存在する講義はあまりなかったと感じる。つまり、教員から学生に対し一方通行であり、知識だけを学ぶ場としての講義が多いのである。もっともっと学生が主体的に学ぶ場としての講義が必要ではないだろうか。このことから、教員の指導範囲も広範囲になり、双方向のコミュニケーションが難しくなる大人数制での講義ではなく、少人数制の講義を実施しなければならないと考える。就職活動では、初めて会う会社の方や他大学の学生とコミュニケーションをとらなければならない。だからこそ、講義を履修した他の全く知らない学生同士で共に考え、共に意見を出し合う場は貴重なのである。

講義内容として、例えばコミュニケーションの向上を目的とした科目であれば、まずは学生同士で数人のグループを作り、自己紹介としてグループ内で自分はどんな人間なのかを紹介し合う。それぞれの自己紹介毎に質問タイムなどを設けるなどして、自ら主体的に相手のことをより深く知る場を設ける。その上で、今度はもう少し大きなグループを作り、別のメンバーに自分以外の他人を紹介する。このことで、自分を表現する力と同時に、他人を紹介するためにも積極的に質問する姿勢や、相手の話を聞く力を養うことができるのではないだろうか。このような感じで講義毎に例えば「学生時代の思い出」や「過去に一番頑張ったこと」などのテーマを設けて講義を進めるといった形である。これは就職活動を通してこんな授業があれば良かったなと感じて、簡単に考えた例であるが、もっとしっかり構成していけば、双方向のコミュニケーションのある、知識や教養だけでない社会人として必要な能力が向上する講義になると考える。

4. 2. 3 地元企業との交流ある講義

就職を考えた上でやはり地元企業との交流は必要不可欠だと感じる。その理由として主に2つのことが挙げられる。1つは地元企業と交流を図ることで、広島経済大学の学生を知ってもらうことができるという点である。私は広島経済大学の学生だが、企業からの広島経済大学の学生に対しての評価は、お世辞にもあまり良いとは言えないと感じる。その悪い流れを断ち切るためには、広島経済大学の学生を企業にアピールできるような交流が必要だと感じる。もっともっと広島経済大学の学生を知ってもらうことで企業の見方を変えなければならない。しかし、当然のことだが、広島経済大学の学生はダメだと悪い評価を受けてしまうリスクもある。そうならないためにも企業にアピールできる程に教育の実質化を成し遂げ、学生の社会人としての力が養われていることが絶対条件となることは間違いないだろう。リスクを犯してまで交流を重要視する理由は、それぐらいのことをしなければ企業や世間の広島経済大学に対する見方は変えられないということである。しっかりとした教育で学生に教育的付加価値を与えた上で、企業や世間にアピールする機会を設けることが重要なのである。そして2つ目は、大学内だけでは学べないことを学ぶことができる点である。地元企業の方々は私達大学生に比べ知識はさることながら、社会人としての能力もはるかに上である。だからこそ、社会を経験したことのない大学生にとって地元企業の方々との交流は大いに成長できる大きな機会に成り得るのである。私自身「富士通エフ・オー・エム」様にお世話になったインターンシップや就職活動でのたくさんの企業の方々との交流を通して、仕事に対する想いであったり、社会人としてのわきまえや、お客様への接し方など様々なことを学ぶことができた。これらの経験も企業や社会人の方々との交流があるからこそ学ぶことができるものなのである。

このように地元企業との交流は就職を考えた上でも、そして学生の成長のためにも必要不可欠なものである。当然、今現在広島経済大学においても地元企業の方を招いての講義は存在する。私自身が受講した講義の中には、様々な業種の方をお招きし、その企業ではどんな仕事をしているのかを大まかに説明して頂けるものであった。業界を知るという意味で大いに役に立つことができたと感じる。また、野村證券の方々をお招きし金融の基礎知識を学ぶ講義などもあった。しかし、せっかく企業の方に広島経済大学に足を運んで頂いているのだから、もっと講義内容を考え、交流のある講義にすべきだと感じる。業界を知ることも当然重要だが、社会人になる前の学生にとって、もっと具体的な仕事内容や社会の厳しさ、社会人になる前に勉強しておかなければならないことなど、企業の方にしか聞けないことを聞きたいと感じた。また、金融などの講義を企業の方に任すことも、せっかく企業の方に来て頂いている意味があまりないと感じる。教育するという意味では大学の教員の方々のほうが専門分野であり、まして金融や経済学といった講義ならば、教員の方は企業の方々に引けをとらない、またはそれ以上の知識を持ちあわせているはずである。大学内でカバーできるような講義内容ではなく、企業の方にしか教えていただくことができない講義をすべきではないだろうか。

そこで私は新たな地元企業との交流ある講義を提案したいと思う。この講義のポイントとしては、上記で述べたとおり地元企業との交流で広島経済大学の学生をアピールする点と、学生の社会人としての成長である。その事を考えた上で、例えば各企業で実際に起こった問題などをテーマに掲げ、学生がグループ毎にその問題を解決するための話し合いを行うなどである。学生の能力的な面も考え、問題の度合いによっては解決のヒントを提示したり、実際にあった問題を少し簡易版にすることで、しっかりとした話し合いに発展できると考えている。企業の方にはその話し合い風景を観察してもらい、論点の整合性や、討論の進め方、積極性や協調性などの観点からアドバイスを提供して頂く。各グループでの話し合いの結果を発表後、その企業では実際にどのような話し合いになり、どのような結果を導いたのかを聞かせていただくという流れである。このような形ならば、企業の方に学生を知ってもらう機会もできる上、学生自身成長できる場となると感じる。また、企業で実際に起こった問題を掲げることで、企業のことや仕事というものを想像しやすくなり、将来的に就職活動などにも手助けになると考えている。

4. 2. 4 大学側の「教育」に対する意識改革

いくら教育制度を良いものにしても、教育する側の意識が変わらなければ、結局は「教育」を変えることはできない。3. 3 で挙げたとおり、大学側の教育に対する熱意は問題であると考えている。この教育に対する意識を改革することで、さらなる大学の質の向上につながるのではないだろうか。

では、大学側が学生の教育的付加価値を考えた上で、何をしなければならないのだろうか。金沢工業大学の「工学基礎教育センター」を見ると、同大学では教員に対し、講義以外の時間で必ず一定時間以上を「学生のための時間」として学生と過ごすことが義務付けられている。この時間を用いて、学生の個人指導などに充てているということである。これは、「オフィスアワー」と言われるもので、欧米では当たり前のこととして、ほとんどの大学が義務化されている。ここでも日本と欧米の教育に対する熱意の差が感じられるだろう。そもそも大学教師には既得権益として「研究する時間」が認められているのと同時に、「教育する時間」の義務が課せられている。つまり、金沢工業大学などが実施しているオフィスアワーは大学として当然やらなければならないことなのである。ところが、日本の多くの大学はこのオフィスアワーというものを実施していないのが現状だ。当然それは広島経済大学においても当てはまることである。卒業するまでに学生に対して大きな付加価値を与えるためには、この「オフィスアワー」は絶対的に必要だと感じる。さらに、年々大学の敷居が低くなり、大学生としての学力が追いつかないまま大学に入学してくる学生も多々存在する現在において、オフィスアワーはこれから非常に重要で必要性のあるもの

だと感じる。だからこそ、広島経済大学でもこのオフィスアワーを必ず実施しなければならないと考える。

また、金沢工業大学では学生に対しての教育付加価値を最重要視しているため、教員の指導力向上にも努めている。毎年、教員に対して講義の進め方や指導方法などを学習する機会が設けられているのである。このような機会は教育機関として、必ず必要なことだと思う。大学教員という職種は中学や高校の先生と違い教員免許というものがない。そのため、教育することに対する知識が、他の教育機関の先生や講師の方に比べて劣るところがあるのではないかと懸念していた。しかしながら、このように大学教員に対しても教育力向上に向けた教育が実施されていることを知り、安堵した気持ちと共に、違和感を覚えるようになった。この教員に対する教育力向上のための教育は様々な大学で実施されており、広島経済大学においても同様の教育が実施されていることを知った。しかし、私は広島経済大学の学生として教員の方の一方通行の講義や、毎年同じ講義で同じ教材を使い同じような授業を展開する講義を見てきた。断っておくが、私は本大学の教育を中傷したいという気持ちは全くない。中には非常に面白く自分の知識が高まっていくことを感じる講義もある。自ら進んで聞きたくなるような講義もある。しかし、そのような学生のことを考えて講義をされている教員が少ないのではないかと言いたいのである。つまり、教員の方に教育力向上の講義などを行っていることは非常に良いことだと思うが、それが実質あまり効果をなしていないのではないだろうか。その理由として考えられるのは、3. 3で述べたとおり「教育」よりも「研究」を最重要視しているからであろう。もはやこのような状況になるのは当然のことと言える。なぜなら「研究」に対する厚い待遇に比べ、「教育」に力を注いでもそれに見合う見返りが無いからである。つまり、教育に熱心な教員は損をし、教育を怠ったとしても研究に没頭する教員が得をしてしまうシステムが存在するのだ。このような環境では、どんな優秀な教員の方でも「研究」に熱心になってしまうだろう。

私は、このようなシステムを変えていかなければならないと感じている。私は今まで広島経済大学の教員の方々と接し、勉強熱心であり豊富な知識を持つ大学の教員の方々を本当に尊敬している。私のような学生とは比べ物にならない程優秀だと感じる。だからこそ、上記のシステムを改変し、教育の向上に尽力して頂きたいのである。研究も大事だが教育にももっと力を注いで頂きたいのである。そのためには、まず「教育」に対する待遇を「研究」と同等もしくは、それ以上にすべきだと考える。本来、学生が集まらなければ大学経営が成り立たないように、大学として1番重要なことは「教育」である。もっと待遇面を良くすることで、必ず教育に対しても力を入れることができると思う。さらに、学生の声も反映すべきだと感じる。私達学生は各学期末に講義に対して評価を行っているが、その評価は教育にほとんど反映されていないと感じる。これは、メーカーという自社商品に対する顧客満足度を無視するような行為であり、組織としては致命的なことである。もっと教員は学生からの評価を重く受け止めるべきであり、授業評価の高い教員は給与や研究費等の待遇面で優遇され、評価が良くない教員はそれなりのリスクを負う仕組みにすべきで

ある。組織に所属する以上、当然、その人間は評価されなければならないのにもかかわらず、多くの日本の大学で「教育」においてはその当然のことがほとんど行われていない。他の教育機関や教育サービスを主とする企業と大学教育との大きな違いはここだと感じる。教育することに対して、やりがいがあったり、リスクがないことから、大学の教員は教育に対して企業ほどの熱意が持てないのだろう。この悪循環なシステムを変えることで、必ず大学側の教育に対する姿勢も変えられると考えている。若者の人口に陰りが見える中で、学生に付加価値を与える、魅力ある授業を学生に提供できない大学は生き残れない。このことから、必ず教育のシステムを変えなければならないのである。

4. 3 学生の改善

大学の教育の改善において大事なことは、大学側の改善だけではなく、学生側の改善も必要になると考えている。それは、双方が同じ目的意識を持って進んでいかなければ、例え大学が良い教育を提供したとしても無駄なものになってしまうからだ。学生が成長するためには、必ず学生達本人が努力し、向上心を持って取り組まなければならないのである。そこで、本節では学生の教育における改善策を提案したいと思う。

では、学生側の問題点とは何なのだろうか。本論文の趣旨に沿い教育的側面から考えると、やはり教育を受ける姿勢、やる気の欠如が挙げられる。それらの問題点を改善するためには、まず目的を持たせてあげることが大事だと感じる。そこで、例えば金沢工業大学にもあったように大学祭などで学生自身が研究してきた成果を披露する場所があることは非常にやる気につながると感じる。やはり、一般のお客様や他の学生にも披露するとあって、恥ずかしいものは出すことができない、より良いものを披露したいと感じるだろう。だからこそ、広島経済大学においてもただ模擬店や学園祭実行委員による催し物のみではなく、教育的なものを披露する場としての学園祭にすべきではないだろうか。さらに目的意識という意味では大学の総仕上げともとれる卒業論文をもっと重要な位置付けにする必要があると感じる。学生の卒業論文に対しての取り組む姿勢は、各ゼミによって大きく異なる。それは、ゼミ科目として卒業論文が組み込まれているため、ゼミの担当教員によって卒業論文の重要性における比重が異なるからである。よって、卒業論文を簡単に仕上げて卒業する学生も多いのではないだろうか。それならば、例えば学科毎、人数が多いようであれば複数ゼミなどで、学生全員が卒業論文を発表する機会などを設け、素晴らしい論文であれば表彰するなどの催しがあれば、学生の取り組む姿勢も変われるのではないだろうか。学生も何か目的を持って行動することで、教育に対する姿勢、やる気は必ず向上するはずである。

また、上記

4.4 実質的な就職力の向上

- 地元企業との交流を増やす。→今現在の広島経済大学は、企業からあまり良い評価を頂いていないと感じる。だから地元企業に愛される大学を作る必要があると思う。就職率の上昇にも繋がれば良いと考える。学生のうち地元広島県出身者が多いことから地元企業の評価が大事になると思う。
- 必修制度
- 就職、地域貢献（企業などにも）に特化した大学作り
- 就職率

4.2 教育の実質化

- 就職に向けての教育、社会人にとって必要な力を養う教育が必要だと考える。（就職活動を経て体感）
- 大学は教育サービス機関。入学してくる人々は学生であると同時に顧客。顧客である学生にどんな付加価値を提供できるか。ところが、多くの日本の大学は学生のための大学ではなく、教員や職員など大学人のための大学に終始している。本来、教える側と学生の双方向のコミュニケーションを実現すべき。しかし、一方通行がほとんど。

4.3 大学側の「教育に対する意識」改革

- 教員は学生から評価され、授業評価の高い教員は給与や待遇面で優遇される仕組み。教える能力を向上させる必要がある。若者の人口に陰りが見える中で、学生に付加価値を与える、魅力ある授業を学生に提供できない大学は生き残れない。

4.4 学生の改善

学生の勉学へのやる気。学生も改善する必要があると感じる。

- 大学祭、卒論発表
- [http://www.s.fpu.ac.jp/FD/FD%E3%82%BB%E3%83%9F%E3%83%8A%E3%83%BC\(1\)/kitlec.pdf](http://www.s.fpu.ac.jp/FD/FD%E3%82%BB%E3%83%9F%E3%83%8A%E3%83%BC(1)/kitlec.pdf)
- 大学の教員は既に、教育指導を受けている。広島経済大学では数年前から実施。しかし、学生の満足のいくものになっているのか疑問。制度は充実。中身を変える
→教授は授業よりも研究優先??

<なぜ??>研究好きということも考えられるが、おそらく授業で評価されるよりも研究で良いものを仕上げたほうが多大な利益があるから。つまり、授業熱心にしても大した利益はなく、研究をしたほうが利益が大きい?だから教育熱心にする者が損?仕組みはよくわからないがこの辺りに改革のヒントが隠されていることを願っています(; _ _)

- 就職率はすでに広島経済大学は高い。しかし、学生はそんな風感じてない。つまり数値と実際とではギャップがある。つまり実質的な就職力 **up** が必要。

5. おわりに

参考文献

書籍

- [1] 天野 郁夫,『大学改革—秩序の崩壊と再編』, 野村総合研究所(2008.8)
- [2] 諸星 裕,『消える大学 残る大学—全入時代の生き残り戦略』, 総合研究開発機構(1989.4)
- [3] 中谷 彰宏木下,『大学時代しなければならない 50 のこと』
- [4] 浅野純次,『大予測 10 年後の大学』, 大学未来問題研究会(2001. 7.12)
- [5] 中村忠一,『大学倒産』, 東洋経済新報社(2000.5.11)
- [6] 山内太地,『下流大学に入ろう』, 光文社(2008.12.25)
- [7] 増田晶文,『大学は学生に何ができるか』, 株式会社プレジデント社(2003.12. 18)
- [8] 中村忠一,『大学倒産-定員割れ、飛び級、独立行政法人化』, 東洋経済新報社(2000.5.11)
- [9] 鈴木雄雅,『大学生の常識』, 株式会社新潮社(2001.11.15)

インターネット

- [1] 文部科学省「学校基本調査報告書」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08121201/002.pdf
- [2] 日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター
<http://www.shigaku.go.jp/shigandoukou20.pdf>
- [3] 厚生労働省大臣官房統計情報部「人口動態統計」
平成 16 年人口動態統計月報年計(概数)の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai04/index.html>
- [4] 広島経済大学ホームページ
<http://www.hue.ac.jp/>
- [5] 玉川大学ホームページ
<http://www.tamagawa.jp/>
- [6] 金沢工業大学
<http://www.kanazawa-it.ac.jp/>